

寺田寅彦

池





池



大学の池のまわりも、去年の火事で、だいぶ様子が変わってしまった。建物などは、どうでもなるだろうが、あの古い樹木の復旧は急にはできそうもない。惜しいものである。それでも、あの大きな木が、全部は焼けなくてしあわせであった。たとえば池の北側に、大きなまっ黒く茂った枝を水面近くまでのばしている、あの木などもこの池の景色をスペンファイする一つのだいじな要素になっているのだが、あれなどの助かったのはしあわせ

である。毎年この木の下で、ドイツプサークルをすえては、観測の稽古けいこのお相手をして来た私には、特にそんな気がする。

あの木の下すいれんの水面に睡蓮がある。これはもちろん火事にはなんともなかったに相違ない。ことしの夏、どこかの画学生が来てあれを写生していた。モネーの有名なシリーズがなかったら、ああいう構図は、洋画としてはオリジナルかもしれないが、今では別に珍しくはなさそうである。もっとも対象はいくら古くても、目と腕とが新しければ、いくらでも新しい「発見」はできるはずだろ

うが、私の見たできばえでは、そうでもなさそうであった。

あの睡蓮は近ごろのものである。もとは河骨こうほねのようなものと、もう一種の浮き草のようなものがあったのだと記憶している。ことしは睡蓮が著しく繁殖して来た。紅白二種のうちで、白いほうが繁殖力が大きいように思われる。実際そうであるか、どうか、専門家に聞いてみなければわからない。事実はどうだか知らないが、もしそうだとすると、これは一つのおもしろい問題になりそうである。それから、もし、睡蓮が他の水草を次第に圧迫

して蔓延まんえんするか、しないか、これも問題である。物好きな人があつたら、年々写真でもとっておいて、あとで研究したらおもしろそうである。

ついでながら、池には大きな鯉こいがかなりたくさんいる。あたたかい時候には時々姿を見せるが、寒中には、どうしているかさっぱり見えない。大きなすっぽんもいる。そうだが、私はまだ見た事がない。あの火事では鯉やすっぽんもずいぶん驚いた事だろう。あの時に一度池の水の温度でも測ってみたらよかったと、あとで思いついたが、当時はそれどころではなかった。事によると薄いスプル



ングシヒトぐらいはできていたかもしれなかった。

鯉については、某教授に関する一挿話いっそうわがある。教授が池を見おろしながら、小使いの某君と話していた。教授が「あいつを食ったらうまいだろうな」とひとり言のように言ったのに答えて、小使いが、あまりうまくないとか、苦にがいとか言ったそうである。これに対する教授の電光のようなリマークは「ヤ、貴様食ったな」というのであった、と伝えられている。事実には保証しない。

鯉こいやすっぱんのほかに、ブルフログを養殖しようという話もあったと記憶しているが、結局おやめになったと

見える。もしほんとうに、あすこに、大きなブルフログが繁殖して、大きな声でも上げているのだと、少なくとも何事かを考えさせられそうである。場所がらだけに、少なくとも新聞の青鉛筆子や漫画子の材料にはなっていたかもしれない。

池のみぎわでおたまじやくしの行列を見る事もある。あの行列の道筋に何か方則があるだろうか、水流と何か関係があるだろうか。そんな事をだれかと議論した事があった。もちろんなんの結論も得られなかった。

冗談はさておいて、この池が、これまでに、いろいろ

のまじめな研究の材料を供給している事も、数え上げれば、少なくなないようにある。

池中に棲息せいそくするある生物の研究を、学位論文の題目とした先輩が、少なくとも二人はあるそうである。

田中館先生たなかだてが電流による水道鉄管の腐蝕ふしょくに関する研究をされた時、やはりこの池の水中でいろいろの実験をやられたように聞いている。その時に使われた鉄管の標本が、まだ保存されているはずである。

月島丸つきしままるが沈没して、その搜索が問題となった時に、中村なかむら先生がいろいろの考案をされて、当時学生であったわれ

われがお手伝いをして予備実験をやった。なんでも大きなラツパのようなものをこしらえて、それをあの池の水中に沈め、別の所へ、小さなボイラーを沈めたのを鎚つちでたたいて、その音を聞くような事を行ったように覚えてゐる。第二次の実験は隅田川すみだがわの艇庫前へ持って行ってやったのだが、その時に仲間の一人が、ボイラーをかついでさんぼし棧橋から水中に墜落する場面もあつて、忘れ難い思い出の種になつてゐる。

墜落では一つの思い出がある。三年生の某々二君と、池の水温分布を測つた事がある。池の中島にガルバをす

えて、小船でサーモジヤンクションを引っぱりあるいては、時々の水温の水平ならびに垂直分布を測った。冬の最中のある日に観測中に某君が誤って水中に落ち、そのために病気を起こした事もあった。水温の分布はあまり珍しい事もなかったが、深い泥どろの中の分布を測ったのは、いくらか珍しいほうかもしれぬ。

この観測に使った小船は、今は理学部の北玄関の壁に立てかけて乾燥状態にある。もとは大きな盥たらいを浮かべて船の代わりにしたものであるが、いろいろの観測に必要だといふので、水産講習所へ頼んで造ってもらったも

のである。池につないでおくと、たぶん職人か土方だろうが、よくいたずらをして困るので、ああして引き上げておくのである。ナンキン錠をいくらつけ換えても、すぐ打ちこわされるので、根気負けがしたのである。無論土方か職人のしわざに相違ない。

池の周囲の磁力測量、もつとも伏角だけではあるが、数年来つづけてやって来て、材料はかなりたまっている。地形によって説明されるような偏差がかなり著しく出ていておもしろいから、いつかまとめておきたいと思いつながらそのままになっている。池の断面の形をした鉄板の

片を電磁石の間において、それに鉄くずを振りかけて、その磁力線の分布を、実地と比較した学生もあつた。

池の氷が張りつめた上に、雪が積もると、その表面におもしろい紋のような模様ができる。これはドイツで

Dampflöcher と称するものだそうで、この成因はあまり

明らかでないらしい。田中阿歌磨たなかあかまろ氏著、「諏訪湖すわこの研究」

上編七一六ページにこれに関する記事と、写真がある。

数年前の「ローマ字世界」にも田丸先生たまるが、この池のものについておかきになったのが出ている。先生がたのお手伝いをして、例の小船で調べて回ったこともあつたが、

とにかくおもしろい現象である。

先年水温を測る時の目じるしに、池の中のところどころに立てておいた竹ざおが雪の薄くつもった氷の上に頭を出している場合に、さおの北側へ妙な扇形の模様ができる事があった。これもおもしろいものである。これに関してはおかつて気象集誌に簡単な記事をおいた。

池の水の振動、いわゆるセイシについては、本多さんほんだたちの調べた結果が、大学紀要の二十八巻の五に出ている。ブリキで作った小さな模型もあったはずである。この池の水の運動についてもまだ調べれば調べる事がいく



らでも残っている。池の測深もその時やった結果が紀要に出ている。案外深い池である。

自分の知っているだけの文献を数えてみても、これだけあるのだから、私などの知らない他の方面の学科に関するものをあげたら、ずいぶん分量になるかもしれない。これから後にもまだどれだけの可能性があるかわからない。

こんな事を考えてみると、あの池は、いつまでもつぶしてしまいたくない。大学の地面が足りなくなつて、あらゆる庭園や木立ちがつぶされる時が来ても、あの池は

保存しておいてもらいたい。景色や風致がどうであるというのではなくて、何かしら学術上の研究資料の供給所として、あるいは一つの実験用水槽すいそうとして保存してほしいのである。

ついでながら、あの池の成り立ちについても問題がある。ある人の話では、元来あすこに泉があったのを、前まえ田家だけの先祖が掘り下げて、今の形にしたのだそうである。そう言えば池の西北隅せいほくぐうから水がわいているらしい。そのへんだけ底に泥どろがなくて、砂利じやりが露出している事は、さおでつついてみるとわかる。あの池から、一つの狭い谷

が北のほうへ延びて、今の動物地質教室の下からやよいちよう弥生町の門のほうへ続いてきた事が、土工の際に明らかになったそうである。この池の地学的の意味についても、構内のボーリングの結果などを総合して考えてみたら、あるいは何事かわかりはしまいか。こんな空想を描いてみる事もできる。

文科の某教授がとった、池を中心とした写真が、何枚か今のバラック御殿のびかん楣間にかかっている。今ではもう歴史的のものになってしまった。私はいつか、大学百景

といったような版画のシリーズを作ったらおもしろいだろうと思つた事があつた。もしそんなものができるとしたら、その内の少なくとも十景か十五景かの中には、きっと、この池の一部がはいつていたに相違ない。それほどに、この池は、風致の上から見た大学にとって特異なものである。それが一夜の火事でだいぶんに変わった。こういう変化は無論不可逆的变化である。これからさきどんなに美しく変わるかしれないが、大正十二年以前に、大学の門をくぐつた人々の中にある「池」の影像是やはり火災以前のそれではなければならない。

われわれの池が、いろんな小説や感想文の場面に使われた例もなかなか少なくなさそうであるが、このほうの文献はそのほうの専門家をお願いしたほうがよいと思うから、ここではいっさい触れない事とする。

（大正十三年十一月、理学部会誌）



日本文学電子図書館

---

# 池

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第二卷  
岩波文庫、岩波書店

昭和39年 1月16日 第22刷発行

---



日本文学電子図書館